



撮影：(株)オウル・李春湖

はま  
さき  
りょう  
濱崎 亮さんに聞く

株式会社メガネトップ

# 潮流

## 虫の鳴き声で 「きこえ」を体験

高齢者も子どもも楽しみながら  
「きこえ」を体験できる場をと、  
虫の鳴き声を当てるワークショップを  
開催してきた。

1400万人が聞こえにくさ抱える

株式会社メガネトップは、メガネやコンタクトレンズ、補聴器や、その他の関連商品を販売する「眼鏡市場」を全国展開しており、販売だけでなく国内でフレームも自社生産している数少ない会社だ。各店舗では、「見え方」や「きこえ」に関して、多くの人に体験してもらおう場を提供してきた。このうち、「きこえ」について親子で学ぶことができるワークショップを今年8月と9月に、静岡県内の博物館と神奈川県内の図書館で開催。虫の鳴き声を当てるクイズや音の振動実験などを通して、楽しみながら学べる体験型のイベントとなったという。

濱崎 実は、日本には、何らかの「聞こえにくさ」を抱えている人が、高齢者を中心に約1400万人以上いると言われています。このうち補聴器を利用している人は約200万人と言われていますので、ほとんどの人は「聞こえにくさ」の自覚がないということになります。私どもの店舗に来店いただければ、「聞こえにくさ」を確認したり、相談をお受けしたりすることができますが、自覚のある方は限られています。そこで、博物館や図書館にご協力いただき

て、家族ぐるみで楽しみながら「きこえ」について学ぶことができる場になればと、無料のワークシヨップを企画しました。

ワークシヨップでは、同社が作成した『よるの むしのね ずかん』を活用し、実際に7種類の虫の鳴き声を聞いてもらった。登場した虫は、鳴き声の高さが低いものから高いものの順に、カンタン、エンマコオロギ、スズムシ、クツワムシ、カヤキリ、ハヤシノウマオイ、ツユムシ。

人間は年齢を重ねるにつれて、高い音から聞きづらくなっていく。虫の鳴き声の高さ(周波数)は2000Hzから2万Hz以上と幅が広い。一般に、8000Hz以上になると多くの人が聞くことができなくなるため、カンタン、エンマコオロギ、スズムシまでは、多くの人が聞こえるが、ハヤシノウマオイ、ツユムシの鳴き声を聞き取るのは難しくなるという仕組みだ。

濱崎 人は年齢を重ねるにつれ、高い音から聞きづらくなりますので、大人の方には子どもたちと一緒に楽しみながら、幼少期には聞こえていた虫の鳴き声が、聞こえなくなると気付くきっかけの一つになればと思っています。難聴は、単に聞きづらいというだけでなく、放置すると認知に関わ

る能力も低下してしまう恐れがあると言われていています。

『よるの むしのね ずかん』はインターネット上に特設ページを設けており、二次元バーコードを読み取ることで、どなたでも虫の鳴き声を聞くことができますので、興味のある方は、ご自身がどの虫の鳴き声まで聞こえるかチェックしてみてください。

## 聞くことの楽しさを伝えたい

今回のワークシヨップでは、印刷版の『よるの むしのね ずかん』ワークシートを配布して、家に戻ってから、ワークシートに掲載されている二次元バーコードを読み取ると、いつでも虫の鳴き声を再生することができます。同社のホームページにも電子版『よるの むしのね ずかん』を掲載している。例えば、高齢者の方が、お孫さんと一緒に聞いてもらい、自分の聞こえの状態を自覚する機会にしようことや、家族で虫の鳴き声について話し合ったり、楽しくコミュニケーションを深めたりするきっかけになればという思いで作成したという。

濱崎 『よるの むしのね ずかん』は2020年に初めて作成しましたが、もっと

多くの方に、虫の鳴き声を通して、「きこえ」について家族で楽しみながら学んでもらいたいという思いから、今年の8月と9月に、無料のワークシヨップを開催しました。

このワークシヨップでは、メスを呼び寄せるための鳴き方や、縄張りに入ってきたオスを威嚇する鳴き方など、虫の鳴き声の種類や意味についても、説明しています。ワークシートに二次元バーコードを印刷していますので、ワークシヨップに参加できなかった家族の人にも、虫の鳴き声を聞いてもらうことができます。また、音は目には見えませんが、振動している様子を視覚化する実験も行いました。

ワークシヨップでは、虫の鳴き声だけでなく、日常生活で聞く機会があるさまざまな音も体験してもらったという。例えば、ジェット飛行機の飛行音などは、比較的高い音であるため、聞こえづらいつと感じる人もいます。聴力は、視力などと同じように、他人と比較することができないため、聴力が低下してきても、それを自覚する機会がなかなか持てない。今回のワークシヨップは、家族単位での参加を呼び掛けており、虫の鳴き声を素材に、聞こえ方の違いを確認する機会の一つになれば

というねらいがあった。

濱崎 私たちは、来店いただいたお客さまの「きこえ」の相談をお受けすることはできませんが、より多くの人に「きこえ」について関心を持ってもらうために、今回のような博物館や図書館などで開催したワークショップも一つの手段と考えています。

その意味では、学校で、理科などの学習の一環として、虫の鳴き声の聞き取り体験をしてもらい、ご家庭で話題になることも期待しています。教材や素材などのご提供は可能ですので、ご興味のある先生がいらっしやいましたら、ご相談いただけると幸いです。

## 学びの素材の一つとして活用を

最近では学校現場も一人一台の情報端末環境が整備されており、デジタル教科書や教材などの活用も課題の一つになっている。当社が作成したデジタル図鑑やワークシートも、虫の鳴き声を通して、より多くの人に「きこえ」への関心を高めてもらうと同時に、家族ぐるみで視聴することで、聞こえにくさを保護者や高齢者が自覚するきっかけにしてもらうものだが、虫の生態や「きこえ」には個人差があることなどを学ぶ教材として、学校が活用

することもできそう。

濱崎 私たちが作成した「よるのむしのね ずかん」や、虫の鳴き声などの素材を、学校の先生方が授業などで活用していただけなら、とても光栄に思います。単に虫の鳴き方について興味がある子どもたちだけでなく、その「聞こえ方」に一人一人異なることがあることを学ぶ機会になるのではないのでしょうか。

例えば、散歩に出たときの枯れ葉が風に舞うカサカサという音や、小川のせせらぎなどの「聞こえ方」も人によって違ってきます。子どもたちも「自分にはこの音は聞こえるけれど、聞きづらいという人もいるんだな」という気づきにつながるのではないかと思います。

虫の鳴き声を通して「きこえ」についての気づきを広げるという今回のワークショップは、普段の生活の中で、虫の鳴き声そのものを聞く機会が減っている子どもたちにも興味を持ってもらうかもポイントの一つ。濱崎さんたちは、虫の鳴き方の違いやその意味、また他の虫の鳴き声との「聞き分け」などを説明に加えた。虫の生態など、理科的な学習にも活用できる。虫の鳴き声を聞く人間側の「きこえ」の違いを通して、一人一人の個性

を尊重する考え方の育成など、道徳的な学びにも応用できそう。

濱崎 今回のワークショップは、大変好評で、他県でもやって欲しいという反応もいただきました。より良い「よるのむしのね ずかん」ワークショップを目指し、ワークショップは二度改訂しました。今回のワークショップも、虫のシールを用意して、クイズに正解したらシールを貼るといった工夫を新たに加えるなど行いました。

学校の先生方は教育のプロですので、子どもたちの状況に合わせて、虫の鳴き声を素材に、いろいろと授業で活用していただけるのではないかと思います。また、ワークシートに対して「こういう内容を加えてほしい」などのご意見をいただけたらうれしいです。ワークショップは、直接ダウンロードはできませんが、ご要望があれば、ご提供いたしますので、ご連絡いただければと思います。

『よるのむしのねずかん』特設サイト  
<https://www.meganetop.co.jp/mushinone/>

